施工者に幸あれ 第61回

構造家・斎藤公男の日々

半世紀のストーリーを超えて

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

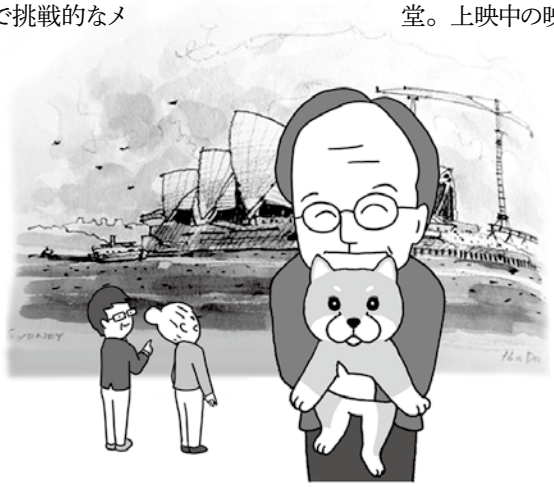
■スケッチの滲みも雄弁

斎藤画伯と呼びたい。構造家・斎藤公男さんのスケッチ集の「風に向かって」（彰国社）が余りに素晴らしいから。優しいタッチと色彩，構造家だからこそ描ける建造物の確かな形。「どうしても人物を入れたくなる」し，車や鳥なども描かれていてとても温かい絵。旅に逸る気持ちと孤独が，エッフェル塔の滲みに残る一枚。旅先のホテルでロックグラスと筆をもつ先生の姿が，目に浮かぶようです。その時代を，サグラダファミリアやオペラハウスのタワークレーンが明かしている。自由の女神までの航路から描いたマンハッタンには，ワールド・トレード・センター…。1ドル360円時代の日本人に海外旅行は特別なものでした。

日本大学理工学部建築学科での学究生活，日本建築学会会長としての活動，その全部を「50年間のショートストーリー」と一言のもとに片付けてしまう潔さ。48歳で受賞した日本建築学会業績賞を筆頭に，数ある受賞歴や実績。それらをも凌いで斎藤公男さんの心に光っている想い出は，1972年に海外派遣研究員として渡航なのかもしれません。

■フラー＆代々木との出会い

卒業研究で出会ったB・フラーのジオデシック・ドーム。フラーの放つ未来的で挑戦的なメッセージに魅せられた斎藤青年。坪井善勝研究室での勉学が，構造家として生きる人生を決定付ける。建築家・丹下健三と構造家・坪井善勝の国立屋内競技場プロジェクトを直接見られたという無二の経験。その原点から，出雲ドームや静岡スタジアム，山口きららドームなど，世界に発信する建築が生まれた。構造設計にデザインという概念が認知されていなかった時代を経て，霧が晴れて来たのはごく最近のことと語る。「建築文化（月刊誌）1990年11月号の特集あたりでは?」と，その象徴となった11月号で編集をした覇志堂と話が盛り上がる。「先人の構造家たちが国際的に風穴を造ってくれた。だからこそ，事務所をもたない一研究者がやってこられた」と感慨深そう。建築を生み出すためにも，自分にとっての財産だったという何人もの巣立った弟子たち。今日，各建築の分野で，大いに力を発揮している。



■A-Forumを舞台に

退官して3年，A-Forum（Archi-Neering design Forum）の代表として活動し，誠に忙しい毎日。コアメンバーの和田章さん，神田順さん，金田勝徳さんと，講演会やシンポジウムを開催。スペースと蔵書を，構造設計，構造デザインに従事する若いエンジニア，学生やエディター，メーカー勤務の人にも解放。建築の構造に興味をもっているすべての人を対象に，AFスクールと銘打って，この先の構造界を牽引する。沢山の模型などの資料は「建築倉庫」に置いてあるそうだが，A-Forumの展示台にも興味深いものばかり。天井照明には斎藤公男建築を語るに欠かせない「膜」のカバーが付いていて，和む光を演出している。なかには建築家の横河健さんから贈られた猫の写真。子猫に負けないくらいに優しい眼差しで，大好きな動物談義をされるのでした。

何事にもアクティブな斎藤さんは，直接建築にかかわることに限らず何事にも探究心をもつ。「すべてがいつのまにか建築につながる感じですね」と覇志堂。上映中の映画「ハドソン川の奇跡」も鑑賞済み。ハドソン川に不時着して155人の命を救ったパイロットの実話だ。冷静沈着な判断力で，副操縦士らを引っ張って乗り切った，プロフェッショナルエンジニア。共通点を述べよと宿題を出された。この続きは，皆さん是非A-Forumに行って斎藤公男さんと直接！